

述懐(頼山陽)

十有 三春 秋

逝く者は 己に 水の 如し

天地 始終 無く

人生 生死 有り

安くんぞ 古人に 類して

千載 青史に 列するを 得ん

十有三春秋 逝者已如水  
天地無始終 人生有生死  
安得類古人 千載列青史

解説 頼山陽が数え年十四歳の正月を迎え、十三年の歳月を振り返り、人生の何たるかを考え、みずからの大望を詠じた詩。

語釈 ※述懐 胸中に抱く感慨を述べること。 ※十有 有は又に通じ、加えるの意。「十プラス三」、十三歳の意。 ※春秋 一年の総称。または年齢を表わす。 ※逝者 過ぎゆくもの。歳月をいう。 ※天地無始終 天地は悠久で、いつ始まりいつ終わるということはない。 ※人生 人の一生。つまり、死を表わしている。 ※安得 何とかがして欲しいという欲望を表わす。 ※類古人 古の偉人のように。 ※千載 千年の後までもこの意。 ※青史 歴史に名を連ねる。

通釈 月日の移り変わりの早いことを表題する諺はたくさんあるが、今、十四歳になつて過ぎ去つた十三年間を振り返ると、それは実感として胸を打つ。真に過ぎ去つた月日は、川の流れのようで、二度と帰つてはこない。人間は天と地の間に仮住居しているのであるが、天地の歴史はどれほど続いているものか、誰もその始めと終わりを知ることが出来ない。それに反し、人間は生まれたならば必ず死ななければならぬ。これが約束であり運命である。そうであるならば、努力精進をつみ、古の偉人・文人のように、歴史の上にその名を永久に留めたいものである。